

平成 26 年度

グローバルステージ in BRAZIL・in HAWAII 報告書

---

海外県人会人材育成・活用推進事業実行委員会

# 目次

---

01

**東雲 雄飛**

西南学院大学人間科学部 2年

03

**平 牧子**

福岡大学工学部 2年

05

**平野 梓**

西南学院大学法学部 2年

07

**米村 淳平**

特定非営利活動法人九州海外協力協会

09

**東郷 秀朋**

筑紫女学園中学校・高等学校

11

**古和 尚之**

九州工業大学工学部 1年

14

**満行 彩芽**

福岡教育大学教育学部 2年

16

**鈴木 愛誠**

九州大学医学部 3年

18

**木村 彩花**

株式会社六峰館

21

**筒井 美里**

株式会社久原本家食品茅乃舎

# グローバルステージ in BRAZIL に参加して

西南学院大学人間科学部 2年

東雲 雄飛

今回このプログラムに参加するにあたって三つの目標を設定した。

- ① ブラジル移民について深く学び知ること
- ② 現地の日系人の方と交流し今後どのようにに関わり、交流をしていきたいかを話し合うこと
- ③ 自分自身で学び、感じたことを福岡で多くの人に発信し伝達していくことだ。

移民についての話はほぼ毎日聞くことができたが、私はその中でも農業面について学び、話を聞いた。コーヒー以外の農業は何があり、日本の技術を用いたのか。異国の地ということでの苦勞についてだ。

当時の日本人は、行儀正しく、自然を愛し土に親しむのが好きというイメージだったようだ。ブラジルの農民と開拓の苦勞を共にしたことで更にブラジルの国民から大きな信頼が寄せられた。

農業移民達はコーヒー農場のココロ生活からスタートし、やがて独立農へと移行していった。農具は、日本の農具を元に独自のものを作り出し活用していたので唐箕や千歯こきに近かった。作物は日本や他国から取り入れ品種改良して技術革新を起こした。お茶、いぐさ、ラミーが代表的なもの。サンタクルスというブラジル原産のトマトも日本人が作った品種である。農法では、狭い耕地を利用し作物を作る集約農法をブラジルで始めた。食料生産の多様化のためで多角農法と呼ばれ多くの学者たちは日本移民の功績と言う。その他には果物、野菜を作る近郊型農業、コーヒーなどを作る奥地型農業があった。近郊農業はじゃがいもから始まり今でも日系の農家が多く占める。

移民の楽しみは、運動会、演劇、碁、映画と想像より充実していた。日本からブラジルに向かう船内でも催し物や各港での風物が楽しみであった。また、教育を大切にして日本語学校を村に作った。

今でも農業を行っている日系の方は多くいて、峰均さんは独学でシメジ栽培をはじめ、困難にも挫折せず試行錯誤の末に成功された事業家。中村勉さんは、収穫量も多く、作業効率も高く、水も少なく、農薬を使わない炭素循環農法の成功者。このように活躍されている方がいて、今でも日々努力をしている。

ブラジルは移民者が多く多民族国で、日本は島国で単一民族。ブラジル人が本来の人のあるべき姿で日本人にはしきたりが多い。小学生のように何事にも興味を持ち、知らない人でも気軽に声をかけるように積極的になるべきだ。子供は自然とそうすることができるが、大人になるとそうはいかなくなる。ホストファミリーの方が言うには今、県人会は高齢化に伴い考え方も古くこのままではなくなってしまいそうだとことだ。自分は、出来れば関わろうとは思わなかったが、子弟招へい事業に子供を参加させて、日本、福岡、県人会の大切さ、また自分たちが県人会に関わっていき変化をもたらしてなくてはならないと感じたそう。そのために、今回のグローバルステージのような活動で新しい風を県人会に入れることが大切だと感じた。

上記の二つの目標は自分なりに達成できた。残るは三つ目で文章に残したり、発表したりすることで、ある程度多くの人に知ってもらえるが、より多くの人に移民の歴史を知ってもらうには大学の友達や、知り合いに話すことが大切だと思う。またグローバルステージという世界の県人会とつながり関係を持つことができるプログラムについても話していきたい。

今回グローバルステージに参加したことで、移民の歴史以外に福岡にルーツのある人が世界を舞台に活躍していること、県人会という組織が存在し福岡と交流していること、と多くのことを学んだ。たくさんの人に出会いお世話にもなった。この出会いをここで終わらせるのではなく連絡を取り続けて将来にまでずっと続くようなものにしないでほしいと感じた。

# 報告書

福岡大学工学部 2年

平 牧子

私は、ブラジルに行く前に二つの目標を決めました。

一つ目は、私は、「衣・食・住」の中で、住について現在学んでいるのですが、人間は、「衣・食・住」がすべて揃って、やっと快適に生活できると思います。なので、ブラジルでは、住についてももちろん学び、衣・食については、ブラジルでの滞在期間中に次第に慣れ、ブラジルという国の習慣、国柄などを理解したい。特に、私は、ブラジルの建築物、国特有の色のセンス、デザインを学びたいです。将来、海外で建築関係の仕事で働きたい私にとって、いろいろな国の色のセンス、デザイン、形などを実際に見て、感じ、学びたいということです。

二つ目は、ブラジルの福岡県人会の方々たくさん会話をして、福岡に帰ってきてても交流が続くようにしたいということです。

この二つの目標を達成することができるようにブラジルでの滞在期間中、心がけるようにしました。

ブラジルでの滞在期間中、私たちは主に車で移動していたのですが、車での移動中、ずっと外を眺めていて、たくさんのブラジルの風景を目で見ることができました。車の中から眺める風景は日本と違い驚くことがたくさんありました。ブラジルでは、壁であるありとあらゆるところに落書きがありました。その落書きも、日本によくある文字の落書きではなく、まさにアートといったほうが良いような落書きがあり、ブラジルの空港に到着し、車で移動している間、その立派な落書きに驚いたことを思い出します。ブラジルといえば、ブラジルの国旗のようにカラフルな色合いをイメージしていたので、私は、その落書きを見て、「ついにブラジルに来たんだ！」と心から感じました。また、そんなに高層な建物が多くはなかったので空がとても綺麗でした。

サントスに行った際には、海沿いに高い建物がたくさん建っていたので驚いていると、南さんが、「この建物は、地盤がしっかりしていないから、傾いてしまっていて正面から見ると傾いて見えるんだよ。」ということをお教えいただきました。私は、そのことに驚きました。日本だと問題になって建て壊されてしまうと思うが、ブラジルではこれでもよいのだろうかと思っても驚きました。

ブラジリアに行くこともでき、オスカー・ニーマイヤーの建築物を実際に見ることができました。オスカー・ニーマイヤーは、ブラジリアの町、全体の設計をしたということをお本で読んだことがあったので、以前から興味がありました。実際にオスカー・ニーマイヤーの建築物を見て、外観と内観の表し方がまったく違い、とても面白いなと思ひ、改めて彼の建築物に興味をもつことができました。いくつか彼の建築物を見たことで、曲線を大事にして主に用い、設計をしているなということを感じました。その面でも、ブラジルは、建築もアートだなと思ひました。私が、ブラジルで最も見ることができて良かったと思う建築物は、ドン・ボスコ聖堂です。ドン・ボスコ聖堂は、外からみると至って普通の建物なのですが、内観はたくさんのステンドグラスが用いられており、大きなシャンデリアからの光があたり、青色のステンドグラスが輝いていて、とても綺麗でした。また、

天井も特徴的でシャンデリアからの光があたり、影ができていました。ステンドグラスとシャンデリアと天井の工夫がすべて丁寧で、とても神秘的な雰囲気、眺めているだけで綺麗なブルーの美しい色の世界の中でとても落ち着いた気分になりました。ブラジルにまた行く機会があったら、もう一度見に行きたいなと思いました。

ブラジルの衣服についてですが、今の日本にも海外の衣服ブランドが進出していることもあり、あまり変わらないように思いました。しかし、三月のブラジルは、日中はとても暖かくて半袖で過ごすのがちょうどよかったです。三月頃の福岡はとても寒いので、日本とブラジルは北半球と南半球で遠く、季節が違うのだなと改めて感じました。

ブラジルの食事は、トウモロコシを用いた食事が多く、食文化の違いを感じました。ブラジルの食事は、おいしくてたくさん食べてしまい、朝・昼・晩お腹がいっぱいの状態でした。私は、ブラジルでの滞在期間中、目の前に広がるブラジルの風景、建物、食事を忘れることがないように趣味である写真で多くの写真を撮りました。

私たちが、福岡を出発し、長い飛行機での旅にでて、サンパウロの空港に到着すると、ブラジルの福岡県人会の方たちが垂れ幕を持って出迎えてくださいました。私にとって初めてのブラジルの国で、こんなにも福岡県人会の方々が温かく私たちを迎えてくれたことに感動しました。

ブラジルでの滞在期間中には、初めて会う多くの方と話し、交流したり、多くの方々の前で代表して発表したり、名刺を交換したり、普通会うことが出来ないような大使やスザノの市長にお会いしたりする機会がありました。ブラジルでは、人と人との会話、交流することの大切さを改めて感じることができました。私にとって、人前で話し、初めて会う多くの方々と話し交流したことは、自分を今まで以上に成長させたと思います。

二つ目の目標についてですが、ブラジルでの滞在期間中、今までにこんなにも短期間のうちに多くの人に会ったことがないのではないかというぐらいに、一週間のうちに、たくさんの方々に出会い、話をしました。今回のブラジルでの滞在期間中には、県人会主催の歓迎会やスザノ支部での歓迎会、送別会を主催していただき、たくさんの方々と会ってお話することができ、とても感謝しています。また、青年部との交流会もあり、とても楽しい時間を過ごすことができました。福岡に帰国してからは、たくさん撮った写真を整理し、ブラジルでお世話になった方々に写真を添付して連絡をしました。Facebookなどでブラジルの方々と簡単に連絡ができるのでとても嬉しいです。連絡をとった方たちの中には、「福岡に来ます」という方や「福岡に行ってみたい」という方がいたのでとても嬉しく思いました。彼らが福岡に来る際には、私が福岡を案内したいと思います。今後も連絡をとって交流を続けていきたいです。

私は、今回ブラジルに滞在し、ブラジルに対して親しみを感じることができるようになりました。今後も今回ブラジルで出会った方々と連絡を取り合い、何らかの形でブラジルと繋がっていきたいと思います。

# 報告書

西南学院大学法学部 2年

平野 梓

今回、グローバルステージ in BRAZILに参加するにあたり、わたしは様々な観点から目標をたてましたが、今回はそのうちの大きなトピックである『移民』と『交流』に重点をあて、報告したいと思います。

まず、一つ目が『移民』に関してのものです。去年の夏、私はワークキャンプ・ボランティアのためフィリピンを訪れました。そこで、家族が海外に出稼ぎに行っている家庭のお話をきいたり、家を訪問したりする機会があり、そのことが契機となって、日本における外国人労働者の変遷や人数について調べ始めました。その中で、昔の日本では「出稼ぎ」のために、海外に移住した人がたくさんいたこと、また移民として海を渡った多くの日本人の子孫が日本に「デカセギ」として来日していることなどを知りました。移民についての学びを深めていくと、「Japones Garantido（信頼できる日本人）」という言葉に出会い、この言葉に私は驚きました。なぜなら、日本人は海外に出ると人種差別を受けたり、「ジャップ」と侮辱されたりすることが多いのだろうなと思っていたからです。

そこで、「移民についての理解を深め、どのようにして彼らは Japones Gatantido と呼ばれるまで信頼されるようになったか、また、どのようにしてブラジル社会について馴染んでいったかを学ぶ」ということを目標に立てました。

今回のプログラムでは、移民の歴史について学ぶために、ブラジル日本文化協会内移民資料館やスザノ福博村などを訪れました。移民資料館では、笠戸丸の模型、ブラジル移民が暮らしていた家、またその間取りや家具、道具などを見たり、日本人はブラジルにたくさんの果物や野菜などをもちこみ、「柿」はブラジルでも「カキ」であるということを知り驚いたりしました。また、スザノ福博村では、全人口に対する教育程度の構成比、各年度の人口構成、各年代の日伯新聞の購読比率などについて、分かりやすいように表にまとめてあり、飾られていました。その中で私がもっとも興味をひかれたのは、子供間の会話の時に使用する言語についての割合を示す表と家庭内における主要語の変化についての表です。1960年代には大半の子供たちが日本語を使用しコミュニケーションをとっていましたが、だんだん日本語のみを使う子供たちは減少し、2001年には多くの子どもたちはポルトガル語のみを使用し会話をするように変化したこと、同様に家庭内の主要語は日本語の家庭が多くありましたが、現在ではその数も減少していることが読み取れました。

ブラジルに来る前、移民について調べる中で、かつて海外に移民した人々は「3年働いて、一旗あげて日本に帰る」という意識だったことから、積極的にポルトガル語を習得しなかった人も少なくなかったと知り、その名残で今でも家庭内では日本語を使用しているのかなと想像していました。しかし、現状としては、日本語話者は減少しており、日本に対する興味なども薄れていることを学びました。

二つ目の目標は『交流』についてのものです。世代が変わり、県人会に参加する若い世代が少な

くなりつつあると聞きました。今回のプログラムでは、同世代の福岡県人会のメンバーとも交流できると知り、私たちがきっかけとなって福岡とブラジルの交流が盛んになればいいと考え、「このプログラムで交流が終わるのではなく、福岡に帰ってからも交流を続ける」という目標をたてました。

ブラジルでは、本当にたくさんの人と出会いました。お忙しいにも関わらず、横断幕を持って空港までお出迎えしてくださったり、歓迎会や送別会などに来てくださったり、色々な場所を案内してくださったり、様々なことを教えてくださったり、ホームステイ受け入れをしてくださったり、福岡県人会の方々も温かく私たちを迎え入れ、おもてなしをしてくださいました。その上、たくさんのお土産までいただき、何度お礼を申し上げても足りないほどです。何か自分におかえし出来ることはないかと考えたとき、「これからも交流を続けていこう」「県費留学生など福岡に来る日系人のお手伝いをしよう」と思う気持ちがブラジルに行く前よりも、よりいっそう強くなりました。

また、「発信」することで少しはおかえし出来るのではないかと考えました。したがって、私は「発信」の役割を担っていきたいとも考えています。ブラジルのこと、地球の反対側には素敵な人々がたくさんいること、日本にルーツを持ち日本と関わりが深い人がたくさんいることなどを友達や家族などに発信するだけでなく、日本のこと、例えばサブカルチャーなどをブラジルに対し発信し、若い世代に興味を持ってもらえるきっかけとなれたらなと思っています。

今回、グローバルステージ in BRAZIL では畑、コミュニタージ（ファーベアラ）から JETRO や企業訪問までなど様々な場所を視察し、たくさんの方と出会う機会を与えてくださいました。毎日がタイトスケジュールでありましたが、贅沢なほど多岐にわたる、たくさんの方の経験をさせていただき、そこでたくさんの方の刺激を受けました。ブラジルで経験したこと、感じたこと、学んだことなどを今後生かしていきたいです。



# グローバルステージ in BRAZIL 2015 報告書

九州海外協力協会

米村 淳平

## ■派遣期間：

平成27年2月28日～平成27年3月10日（7泊11日）

## ■設定目標（2／10）

- 1) ブラジル福岡県人会メンバーとの良い関係づくりに励む。  
今後福岡とブラジルで交流ができるような相手を見つける。
- 2) 第9回福岡県人会世界大会にて、現職に無理なく、役に立てるようなポジションの打診をする。
- 3) 知り合いに会う。
- 4) 行けるところは必ず見に行く。
- 5) 每晚、訪問した場所と撮影した写真を整理し、感想を書く。

## ■レポート

グローバルステージ in BRAZIL に参加し、7日間ブラジルに滞在した。たくさんの方々にお会いし、おもてなしをたくさん受けた。7日間を通じて、日程にあるような場所を視察・訪問した中で、3つの観点からレポートを書く。

はじめに、目標達成度を見る。「(1) ブラジル福岡県人会との良い関係作り」は、今後の私自身のやり取りの出方もあるが、ホームステイや青年部との交流が効果的だったと思われる。青年部との交流では、町を案内することが主な目的になりつつあったが、青年部長の Edson Koji Nishikido さんや Marli Mitika Tatemoto さんと、現在もメールのやり取りをしている。スザノとサンパウロでのホームステイでは、夜遅くまで話をしてもらうことができた。長く同じ空間に滞在することができたため、議論を深めることができた。また、現在もメールやSNSのやり取りを継続している。特にホームステイのご家族とは、何でもお願いできるような関係になっていると思う。

「(2) 第9回世界大会」については、口頭でお手伝いがしたいことは数人のメンバーにお伝えしたが、約束を取り付けるまでには至っていない。そもそも、まだあまり内容が固まっていないのではないかという意見もあった。もし職務上都合がつけば有志でメキシコへ行き、事務作業などお手伝いがしたいと思っている。「(3) 知り合いに会う」では、2014年に JICA 日系研修員として丙協会で受け入れた香山イサム氏と再会できた。イサム氏は夜の23時まで働いていることが多く、大変多忙であったが、7日間のうち3度も会いに来てくれた。ブラジル人の情の深さに大変感動した。(目標(4)以下は省略)

次に、ブラジル福岡県人会の課題について書く。メンバーに行ったインタビューを通して教示してもらったことや私自身の考察も併せる。県人会は任意団体であり長く続いてはいるものの、年々青年部の部員が減少していることが問題として存在している。若い世代の県人会入会が減少するという事は様々な問題を生む。近い未来の県人会の担い手がなくなる。メンバーが高齢化する。高齢化したメンバーは、昔の話をよくするようになる。若者は近寄りがたいものを感じ、また離れていく。さらに青年部の部長が交代できなくなり、全体的にマンネリとした雰囲気は漂う。このような悪循環に県人会はあると思う。原因は、今や6世7世にある日系人たちは1世のように、「日本＝福岡」ではなく、「福岡＝日本の県の一つ」または、「日本＝漫画・サブカルチャー」等と、日本への意識・イメージが変遷していることにある。USPで「福岡はどこか知っているか」という問いに、知っていたのは1人だった。結婚では、違う県にルーツを持つ2人が結婚した場合、ルーツが入り乱れてくるとも教えて頂いた。以下引用する。「祖父母は福岡県、妻の両親は群馬県、亡妻の父は佐賀県、母の祖先は栃木県と東京都。私の長男は京都生まれです。みなルーツがあります。大切にしなければいけません。しかし全部の県人会はとても付き合いきれません。なにが重要になってくるか。なにか普遍性と魅力のある方へ引かれていくと思います。県人会にその持ち味が備わっているでしょうか。」。世代を重ねる毎に複雑に故郷が絡み合い、「福岡」を意識することができにくくなっていると思う。またさまざまなしがらみも多いのではないだろうか。

最後に、ブラジル福岡県人会と私たちが今後どのような活動をすればよいかについて、教えて頂いた事と考察を書く。青年部でのインタビューではとにかく若者を集めたいと回答をいただいた。太鼓などの文化体験を通して、日本語ができなくてもルーツを感じられる活動を行う事が必要である。また、現青年部長は、「長くかかるかもしれないけれど、向き合って解決していきたい」とも話していた。「愛着」に目をつける方もいた。一度何らかの形で愛着を持てば、継続して関わっていけるのだと思う。例えば、福岡の県費留学制度や子弟招へい事業である。また今回のグローバルステージのような顔を合わすことのできる交流は、大変効果的であると思う。様々な作業・調整は生まれてくるが、それにより、マンネリ化している県人会内のやり取りが活性化する。若者が意見を言いやすい空気を、県人会の先人が作ることも必要であると思う。また、受け入れ側、派遣者双方への愛着が生まれる。

新しい企画としては、時差を考慮しなければならないが、テーマを決めてスカイプで時間を設定し、議論したり飲み会をしたりしてもよいと思う。そこで出た面白いことを県人会のメンバーに共有する等しても面白いかもしれない。方言のレクチャーをしたり、珍しい料理・飲み物を紹介したりしてもよいだろう。

私は、今回のグローバルステージに参加することができて、ブラジル福岡県人会に愛着を持った。おもてなしを受ける側としては、県人会側の負担が大変大きいように思えた。しかし、あれほど盛大で温かく接していただけたのは、一生の宝物である。皆様の温かい笑顔が今も胸に残っている。末尾になるが、ブラジル福岡県人会の皆様と、国内で調整していただいた県国際交流局、福岡県国際交流センターには、改めてお礼を申し上げたい。

ありがとうございました。

## グローバルステージ in Brazil 報告書

筑紫女学園中学校・高等学校

東郷 秀朋

私は今回、「グローバルステージ in Brazil」の第1期生として、同時に福岡県の県民の皆様の代表として、ブラジル・サンパウロへ派遣されました。この7泊11日というブラジル渡航を通して、2つの「真実」を学ばせて頂きました。ここにその2つの「私にとっての真実」をご報告させていただきます。

まず1つ目は「ファベエラの真実」であります。(尚、現在は「ファベエラ」という呼称は蔑称であるとされているため、代わりに「コミュニダージ」という言葉が使われておりますが、ここでは敢えて「ファベエラ」という言葉をそのまま使用致します。)  
「ファベエラ」とは、土地を不法に占拠し、無秩序に建てられた住居に貧しい人たちが密集して住んでいる、所謂「スラム街」や「貧民窟」などと言われる地域のことです。尚、ブラジル全土には大小合わせて約3,000もの「ファベエラ」が存在していると言われております。そこでは、毎日のように麻薬売買が行われ、強盗、殺人、銃撃戦が日常的に発生しているとまで喧伝されております。私は新聞・インターネット、さらにはブラジル生活経験者の方からの情報により、“ファベエラは極めて危険”であるという知識を得るにつれ、だからこそそこに暮らす人々に会い、話をしてみたい、という思いをより一層強めていきました。その強い思いを持ち、ブラジルへ赴きました。

ブラジルに入国後、歓待を賜った県人会の皆様や出会う現地の人々に私はこう尋ねました。「ファベエラは危険ですか？」と。驚いたことに、お尋ねした全員が異口同音に「危険」と回答されました。しかしながら唯一、私のホストファミリーだけは「安全だ」と仰いました。そこでステイ2日目の夕の刻、徒歩で「ファベエラ」へ向かいました。(実は、ホストファミリーは「危険」というお考えでしたので、「私の安全の担保」という観点からご夫婦間で意見の衝突もございました。) その時の格好はホストファミリーが指定した「Tシャツ・短パン・サンダル」というスタイルで、「カメラ・携帯・時計」は持たず、逆に“強盗用”の紙幣と小銭だけ(強盗に遭った際に命の代わりに盗られる用の金銭)をポケットに入れました。

家から5分も経たないうちに私たちは“そこ”にいました。急な坂道に所狭しと立てられた住居、盗電と見られる無数の電線、道路を寸断する大きな亀裂、そこを流れる濁流、時折感じる鼻を刺すような悪臭——。そして歩きながら感じる“恐怖心”による鼓動の早まり、背後から襲う“虚像”への警戒——。しかしながら、その目に見えぬ恐怖は一蹴されました。それはそこに暮らす人々と会話によってです。私は幸運にも4名の方々にインタビューをさせて頂きました。その質問は「暮らし」と「治安」についてです。30年間そこでお店を営んでいるある店主は、「仕事もある。子どももいる。幸せだ」と仰り、またある店主は「景気はいい」と快活にお答え下さいました。そして、こう続けられました。「ここが危険？それはここに来たことが無いからだ。誤解だよ」と。また別の店主は「確かに危険はある。私も夜10時以降は極力外に出ない。でも、危険なのはここだけかい？サンパウロはどこも同じじゃないか」と。

私は虚を突かれた気がしました。完全に“先入観”という悪魔に支配されていたことに気づかされました。たった30分間という短い滞在でしたが、私の「ファベラ」の概念は一変しました。そこに“恐怖”や“虚像”は存在せず、あるのは活気に満ちた人々の生活、大人たちの甲高い笑い声、子どもの無邪気な笑顔、そして、私たちと同じごく普通の“日常”でした。これが「ファベラの真実」です。無論、これは飽くまで私個人が見た「真実」であり、統計学的見地から見れば、ブラジルは犯罪発生率が日本の400倍という数字は紛れもない事実です。ですからこの私の経験による「ファベラの真実」を一般化するのには極めて早計であるの言うまでもありません。しかし1つ申し上げられることは「私がこの自分の目で見たもの」、それこそが私にとっての真実である、ということです。

さて、ここまで1つ目の真実を述べて参りましたが、2つ目は「県人会についての真実」です。私はブラジル渡航前に「課題」を設定いたしました。それは、「史実を学び、伝承する」ということです。渡航前に学んだ事実、移住された皆様からの生の声、現地での貴重な資料等、得た知識は豊富にあります。しかしこの渡航で得た真実は「移住された人々や県人会の皆様お一人お一人の信条や価値観に差異がある」ということです。加えて、「史実を語ろうとしない方もいる」ことや、「最早その歴史に興味が無い方もいる」という事実です。これが私にとっての「県人会引いては移民された方々の真実」です。これは私の浅い経験からのみ得た真実であり、これだけを持って県人会を一般化することは1つ目の真実同様できません。だからこそ今後も継続して、県人会の皆様や現地の方々と継続してコンタクトを取り、その課程でさらなる知識や情報を集め、真実をより一層確信的なものにする必要があると感じています。その継続性こそが、このグローバルステージの第一義的な目的である「県人会の皆様、とりわけ青年部の皆様とのネットワーク構築」を果たすことになると考えています。

最後になりましたが、このプログラムを提供して下さいました福岡県様、現地で心温まる饗応を賜りました福岡県人会の皆様、そして関わられた全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

また、今後第2期生として世界へ雄飛される皆様におかれましては、目覚ましいご活躍をなされますことを心中よりお祈り申し上げます。

## グローバルステージ in ハワイ 報告書 2015. 3. 6 ~ 2015. 3. 14

九州工業大学工学部 1年

古和 尚之

ハワイ島・オアフ島での7泊9日間の研修を通して、僕たち5人は日系人のついでの歴史を学ぶこと、そして、日系人の方々との交流の中から、多くの今まで知らなかった知識を得、これから自分たちにできることは何なのか考えるきっかけを与えてもらったと思っています。

今回、ハワイへ向かう前に2つの目標を設定し、県知事表敬時、県議会議長表敬時に意思表示させていただきました。自分が設定した目標の1つは、日系人の歴史を学ぶことです。時々ニュースを見ていると、日本でも会うであろう名前がカタカナ表記でセカンドネームに出てきていることがありました。ときには、一国の党首であったり、政治家であったりすることもありました。今思えば、とても不思議なことのような気はするけど、誰かの「あの方たちは昔日本から移り住んだ人たちの子孫だよ。」という説明で納得して、「なぜ移民することになったのか」などそれ以上のことに興味を持つきっかけを自分も含めてほとんどの人が失ってしまっているように感じます。ハワイに行かせていただき、日系人について学びことのできるこの機会に日系人の歴史、日系人の生きざま、日系人の中に残る日本文化の名残、日本人のような精神が引き継がれているのかどうか感じ取りたいと考えています。

設定した目標のもう1つは、グローバル化の進む中で文化や習慣の異なる人たちと、相手の気を害すことなく友好関係を作り、長く付き合っていくためにどのようなことに気をつけていかなければいけないかを身に付けてきたいと思います。昨年9月に、大学の短期留学プログラムでマレーシアに行かせていただきました。その際には、マレーシアの多種多様なルーツの方々が形成した文化に触れ、マレー人の方々と交流し、多くの発見とたくさんの貴重な体験をさせていただきました。マレー系、中華系、インド系の方々がともに仲良く暮らしているように見える中にも、ふっとしたところでは同じルーツの人たちが集まり行動するというような光景を目にすることがありました。一つの国であっても何か見えない壁で区切られているような印象を受けました。アメリカでも日系人と白人の間にも何か障壁が存在するのか、残っているのか、そのようなものがあれば、感じ取ってくるということを目指します。

ハワイ滞在7日間の中で、日系人の生活や歴史、習慣が感じられる多くの施設を訪れさせていただきました。プランテーション博物館、ビショップ博物館、ハワイ日本文化センターなどを見学させていただきましたが、その中でも、ハワイ日本文化センターでのハワイ日系移民についての展示「おかげさまで」展はとても印象に残っています。展示物には、ハワイ日系移民の歴史に始まりに、当時の生活を感じさせるレプリカ品や写真などがありました。初めの展示物に、12個の石碑がありました。そこには「孝行、恩、我慢、頑張り、仕方がない、感謝、忠義、責任、恥・誇り、名誉、義理、犠牲」という文字が書かれていました。これらの12の言葉は、行李を背負い、夢や貧しい生活からの脱却の念を抱き移民し、過酷な労働に耐え、今日の日系社会を築く基礎となったのは、この12の価値観です。日本で暮らす家族や両親へ孝行したいという気持ち、両親への恩を返そう

という思い。「天国」と聞かされてきたのも関わらず、毎日過酷な長時間労働への我慢と、その状況を打開しようとする頑張り。ハワイに行かせてくれた祖国日本への感謝と忠義。見栄を張って日本を出てきたことと仕送りを待っている日本の家族への責任。日本人としての恥と責任。名誉や義理、犠牲など多くの考え深い言葉が書かれていますが、12の言葉の中で、僕の中に一番深く刻まれているのは「仕方がない」という言葉です。期待や「天国」というキャッチフレーズとは裏腹に、過酷な労働環境と生活環境、逃げ出したくなるようなその状況の中で、一度立ち止まり現状を把握し、先の見えない中で、現状を飲み込み、一つ踏ん張って、その危機的状況の打開に向けて、歩いて行こうというような気概をひしひしとを感じる言葉だと思いました。今や何気なく使っている言葉ですが、このようバックグラウンドを想像しながら、この「仕方がない」という言葉を耳にすると、重みを感じます。ハワイの開拓を支え、今の日系人のハワイ社会における地位を考えると、歴史に名を残した人のみならず、すべての日系人に大きな尊敬の気持ちを感じます。

ハワイ滞在中、ハワイ島で2泊、ホノルルで3泊ホームステイさせていただきました。ハワイ島では Stan Fujiyama, Judi Fujiyama さんのお家に滞在させていただきました。二人はともに日本語の勉強はしているようですが、少し話せるといった雰囲気、「日本語は難しい」と言っていました。初日はステーキと Judi さんと手料理をいただきました。二日目はハンバーガーを食べに行きました。ステーキの肉もバーガーのハンバーグも日本とは全然違うけれど、とてもおいしかったです。アメリカという感じでした。後で、ロコモコも食べさせてくれました。グレイビーソースはなかなかいけます。家の中には日本を感じさせるものがたくさんありました。富士山の書かれた小さな屏風や漢字の書かれた掛け軸などなど日本の文化を感じさせるものがありました。

また、日頃の習慣としても日本の習慣は感じられました。玄関で靴を脱ぐことや白米を主食とすることがありました。ホノルルでは Myles Nomura, Miwa Nomura, Marcus Nomura さんのお家に滞在しました。Marcus 君は5歳です。野球とサッカーをしています。自分も、小学生の時から高校生の時までずっとサッカーをしていたので、家の前で Marcus 君とサッカーをしました。少し教えてあげるだけでどんどん上達して、30分足らずで、見違えるほどパスが上手になりました。Myles は日系3世で奥さんの Miwa さんは日本人です。Miwa さんはもともと英語が堪能であったわけではないようで、日本語と英語の入り混じった言葉を話していましたが、旦那さんの英語を完璧に聞き取っていたので、環境の影響は大きいのだな、と感じました。Myles さんは英語しか話せないようでした。何度か習得に向けて勉強したみたいですが、文法のむずかしさにやられてしまい、日本語の教科書がどんどん増えてしまっているようです。

息子の Marcus くんは日本語も英語も話せますが、日常生活は英語であることから、英語を話すことのほうが簡単であるのであるような印象を受けました。今年の4月から、毎週土曜日に開かれている日本語学校に通えることが決まったようです。

やはり日系人の方とはいえど、日本語を話すことが出来る人は高齢化と減少が続いているように感じました。英語社会のハワイの中で日本語を勉強するという展開にはなりにくいのかもかもしれません。日系人である、先祖が日本人であるということは「日本語を勉強しよう」と思うきっかけとしては弱いのかもかもしれません。何かそれに代わる新しいものを見つけ出さなくてはいけないのかもかもしれません。

マレーシアでは、日本のアニメを見て、日本に興味を持ち、日本語を勉強するようになったとい

う人たちがたくさんいました。それも一つの機会だと思います。

また、今回のような人材交流も一つのチャンスなのではないでしょうか。新しい世代の日系人と、若い世代の日系人の余計な気を使う必要のない間柄での交流がこれからの長い目での友達関係やハワイと福岡の人材交流、そして日系人と福岡人の関係をつなぐ懸け橋になりのではないかと、この1週間のハワイ滞在から学びました。

## グローバルステージ in Hawaii を終えて

福岡教育大学教育学部 2年

満行 彩芽

私は、グローバルステージを通してハワイを訪問するにあたり、大きく3つの目標を設定した。「現地の方とたくさん交流をすること」「日本の文化が受け入れられている様子に目を向けること」「移民や日系人が異文化に適応してきたその過程を明らかにすること」の3点である。以上3点を中心にこの研修を振り返る。

まず、現地の方とたくさん交流をする、という点である。ハワイでは福岡県人会をはじめ、多くの方々と交流する機会があった。初めは英語を話し慣れていないことや恥ずかしさが先に立ち、なかなか自分から話を始めることができなかった。しかし、現地の方が明るく話しかけてくださったり、同じ研修仲間が積極的に交流する姿を見たりしたことで、すぐに英語や恥ずかしさといった壁は無くなった。私は数々の交流の場で、日本のことやハワイのこと、祖先のことなど、多くのことについて話をした。私はその中で、福岡について話す現地の方々の姿が非常に印象に残っている。特に福岡県人会の方とお話させていただいたときは、当然福岡に関するお話をもちかけることが多かった。すると福岡の話になった瞬間、必ずと言って良いほど、顔をパッと明るくさせたり少し興奮気味になりながら、自分の祖先の出身地を教えてくださいのだった。福岡に来られたことのある方もない方もいらっしまったのだが、その姿を何度も目にしたときには、やはり自分のルーツである福岡に愛着を持っているのだと感じ、もっと繋がっていたいと感じた。またハワイ島を発つときには、ホストファミリーから「アヤメが日本に帰ってからも、私たちが繋がっていくことが大事。今は Facebook だってメールだってあるんだから。」という言葉もらった。私は、「福岡とハワイの架け橋となるために」という理由で、たくさん交流をするという目標を設定した。しかし、その目標は達成されると同時に、もっとその想いは強くなった。これからも、出会った人と繋がりを続け、そのネットワークにもっとたくさんの人を引き込んでいきたいと考えている。

次に、日本の文化が受け入れられている様子に目を向ける、という点である。この点については、非常に驚いたというのが正直な感想である。というのも、私の想像を遥かに超えて日本の文化が取り入れられていたからである。最もそれが顕著に表れていたのは食生活である。お弁当、ハワイ醤油の醸造、スパムむすびなど、あらゆるところに日本の食文化が見られた。コナ県人会の新年宴会では、煮物、焼きそば、寒天など、和食を中心にお食事が準備されていた。お箸も上手に使える人ばかりで、現地の方は「逆にハワイでお箸が使えないと、『あなた何年ハワイに住んでいるの?』と言われてしまう。」とおっしゃっていて、そのくらい文化は浸透しているのだと感じた。また他にも、町中には日本のコンビニや日本車、日本のお菓子が溢れていて、家の中には日本画が飾られ、日本の茶碗や花札が使われていた。このような日本文化の受け入れられ方に、ハワイにいるという感覚が少し麻痺し、まるで祖父母の家に遊びにきているかのような安らぎを感じたのを覚えている。私は、日本国内で、アメリカや中国、韓国などの文化が取り入れられている様子は何度も目にしてきたが、逆にこちら側が受け入れられている様子を見るのは初めてだった。自分が他人に認めてもら



えると嬉しいように、自国の文化が他国に受け入れてもらえると嬉しいのだと実感した。私も、そして日本も、その柔軟性や開放性を持っていたいと考える。

最後に、移民や日系人が異文化に適応してきたその過程を明らかにする、という点であるが、この点についてはもっと追究してみたかった。なかなか自分から話を切り出すことができなかつたのだ。「日系人であることで悩んだことはありますか」「アメリカ人として日本へ戦争に向かうことをどう思っていましたか」といったデリケートな問題に突っ込んでいく勇気を持てたのは、研修の半ばだったからである。そのため、もっと多くの人に話を聞くことができればよかった、と少しだけ悔やんでいる。しかし、聞くことのできたお話の中にもたくさんの学びがあった。まず、1代目としてハワイに渡った日本人や日系2世は、大きな葛藤の中にあつたのだと感じた。移民の方の多くはその子孫に、日本の美しさや日本人の魂を語っていたという。しかし、「僕のおじいちゃんは何も語らなかつた」という方もいた。また、日系人のお墓の向きには日本に帰りたいという気持ちが表れているというお話も伺った。この他にもいくつかのお話を伺ったのだが、アメリカ人として生きるか日本人として生きるか、帰りたいけど帰れない、こういった様々な考えと現実の狭間で葛藤してきたのだろうと考えた。一方、日系3世2世の方は、日系人としての適応にそれほど困難を感じていないことがわかつた。私は、肌の色が違うことや言語などにおいて、日系人の多くが悩んで生きてきたのではないかと考えていたため、とても意外な現実である。このことには、前述の通り日本の文化が根付いていることや、自分と同じ日系人が多く存在することが影響しているのではないかと考える。自分を異質な存在だと感じる機会自体が少なく、たとえ悩んだことがあつたとしても、共感が得られることで解決されてきたのだろう。この問題については、自分の言葉で聞き、生の声で答えを聞くことができ非常によかつたと感じている。後悔を感じた部分については、今後、大学で研究し深めていくことで自分の身にしていきたい。

私は今回、グローバルステージに参加することができて、本当によかつたと感じている。ハワイという土地は、お金さえ払えば誰でも行くことができる。しかし、これほどたくさんの福岡に所縁のある日系人の方と関わったり、自分の言葉で歴史に触れ、生の声でお話を聞かせていただいたり、という経験は、この研修だからこそできたことだ。私一人で感じ、学んだ多くのことを、家族や友人などたくさんの人たちに伝えていきたい。それが今後の私の使命だと考えている。

この研修を支えてくださった、国際交流センターの皆様をはじめとする多くの方々に感謝している。与えられた貴重な体験を胸に、勉学や国際交流に励んでいきたい。

# グローバルステージ in HAWAII 報告書

九州大学医学部 3年

鈴木 愛誠

今回の研修では多くの場所を訪問させて頂いた。以下私が最も印象の深かった訪問先について報告書を作成する。

## Baby Awareness

《アメリカ（ハワイ州）でのお産の現状》

アメリカでは国民のほとんどが病院で出産する。自宅出産は約1%に過ぎない。保険利用ができる入院期間は48時間であるため、ほとんどの妊婦・褥婦は出産すること（分娩すること）を目的に病院に入院する。保険の関係で在院日数が限られているため、陣痛初来後分娩進行を待つが、分娩が遷延するとすぐに陣痛促進剤の使用を提案される。アメリカではお産に携わる医療者として医師の他に看護師（Nurse）、助産師（Midwife）、ドゥーラが存在する。

### ・自宅出産について

国民の約1%しか自宅出産を行わない。家庭は中流から上流家庭で実施されている。理由として中流家庭及び上流家庭でしか自宅出産の知識が普及していないことが挙げられる。自宅出産では費用が保険適応外、つまり完全自己負担となるため下流家庭では自宅出産の知識が普及しても費用の面で厳しいことも考えられる。自宅出産では3,000から5,000ドルが必要となる。

### ・医療費について

アメリカは日本と異なり、国民皆保険ではない。ある県人会の方は5人家族で月に15万円の保険費用を支払っていると言っていた。高額な保険費用を支払うかわりに病院に入院したり、出産したりしてもその際に請求される金額は少ない。例えて言うと、心疾患により弁置換術および冠動脈バイパス術を施行し2週間入院した際の費用は4万円だった被保険者が加入している保険の種類にもよるが高額な保険費用により、医療機関に支払う金額は少ない。

### ・ドゥーラについて

ドゥーラとは、日本の助産師に一番近い職種のひとつである。ドゥーラとは妊娠・出産・育児をする女性を地域社会で支える仕事である。ドゥーラの存在により帝王切開率は減少しているという報告もある。

### ・性教育について

日本では性教育は小学生から開始される。日本の性教育は小・中・高校と実施されるが、内容は身体の構造、妊娠の成立、避妊についてが大きな軸である。しかし日本の性教育において避妊具の紹介はあったが、実物を使用し使用方法を習ったという人は少ないのではないだろうか。それに対してアメリカの性教育では避妊具の使用方法を伝えるとともに、保健室に避妊具がおいてあるそうだ。日本においてもアメリカにおいても望まない妊娠を防ぐという目的で実施されている性教育だが、実施方法は異なっていることがわかった。

#### ・母乳育児における問題について

現在日本において母乳育児が促進されている。これはアメリカにおいても同じである。母乳は産褥3-5日目に分泌のピークを迎える。この知識を知っている妊産婦は少ない。褥婦は産後母乳がでないことに対して大きな不安を抱いている状況である。日本においても、アメリカにおいても、その知識を出産、分娩の期間で誰かが母親に伝えることで母親の不安軽減を行うことができる。

#### ・母子手帳について

アメリカでは母子手帳は存在しない。助産師によっては手作りの母子手帳を作成して妊娠経過の記録をする場合もある。しかしほとんどの場合、検診では胎児の成長が良好であるか不良であるかの判断を行い、カルテ上に記載するだけである。母子手帳は愛着形成において重要な存在である。

#### JN Coffee farm

コーヒー農園へ行きコーヒーがどのように作られているかを学ぶことができた。コーヒーの実が赤く果汁が甘いと初めて知った。コーヒーの実は手作業で収穫されている。

#### ハワイ大学ウエストオアフ校

授業を見学させて頂き、教育においても日本とアメリカの違いを痛感した。日本の授業が受け身であるのに対して、アメリカは生徒参加型であった。授業開始後から講師とのやりとりが続くため受講してみても楽しかったという印象を受けた。生徒が質問をすることで講師ほどの程度まで生徒が理解できているのかを知ることができ、より深い内容の授業を実施できる。

#### かいわレストラン

日本人の料理人の話を聞いた。彼は10年後日本で自分の店を出店したいと語っていた。現在はアメリカに住んでいるが日本に戻りたいという思いは強いと言っていた。夢を叶えるために現在はネットワーク作りを行っていると言っていた。

#### ワイキキ改善協会

なぜワイキキがリゾート地として成功し続けているのかについて学ぶことができた。今後もワイキキは観光地の中心として進化し続けるのである。

今回の研修により、世界で活躍している福岡県人についても理解を深めることができた。しかし私にとってアメリカでの開業助産師の話聞くことは他ではできない大変貴重な経験となった。自分が多くの医療職の中で看護師・助産師を選んだこと、そして今後どのような人生を歩んでいきたいか再度考える必要を感じた。海外に行くことで日本の良さ・悪さを感じることができた。今回の研修を通して得たネットワークを今後も広げるとともに、福岡県に貢献できる人材になりたいと思う。

# グローバルステージ in HAWAII 報告書

株式会社六峰館  
木村 彩花

## ハワイの歴史について

ハワイは日本人が選ぶ旅行先の上位に上がる観光リゾート地などの華やかなイメージ。しかし、華やかなイメージからは想像が付かない先人たちの築き上げた多くの歴史があるからこそいまのハワイがあることを学びました。昔、たくさんの日本人が移民してきたことによって、ハワイの祖先に日本人がいること、その歴史の中に同じ日本人がかかわっている事、今現在ハワイの為に活動を行っていることを知りました。

その中でも印象的で日本人とゆかりの深い、ハワイと日本人が歩んだ歴史が保存されている場所「Our story・Our history」私たちの物語・私たちの歴史が残るハワイ文化センター。ここでは日本人を祖先に持つハワイの人々が多いことを初めて知りました。最初に目に飛び込んできたそこには「犠牲・義理・名誉・恥・誇り・責任・忠義・感謝・仕方がない・頑張り・我慢・恩・孝行」と大きな石碑に日本語で刻まれていました。これはハワイに来た日本人の思い、大切にしていた価値観を表しているものです。

なぜ日本人は移民し、ハワイで生涯を遂げることを選んだのか、よほどお金に困っている家庭の人が自分を犠牲にして、親孝行の為に、家族の名誉の為に移民してきたのではないかと思います。移民をする際に持ち込み出来るものが制限されており、今のスーツケースのような籠に荷物を詰めハワイにやってきたそうです。この籠が思っていたよりも小さく驚きました。しかしこの持ち込み制限の物すらもともと持っていない人も多数いたようです。

実際に当時の方々は稼いだお金で自分の服を買うわけでも、遊びに行くわけでもなく、ほとんどを日本に送金していたそうです。住む場所はかやぶきの小屋のような場所を支給されており、食事は自給自足の生活でお金のかからないように生活を送っていたようです。ただ日本に送金をしてもそのお金が正しく自分の家に届いているのか、不安に思っている方も多かったようです。またお金が届いていても日本からの手紙で「今月はこれだけか?」「もうお金がなくなったからまた送ってほしい」などの手紙が届く人もいたようです。当時の人々の生活の厳しさ、そして過酷な労働に耐え家族の為に一生懸命働く方の厳しさが展示されているものからよく感じることができました。

その他にも館内には当時の方が思っていた詩や俳句が残されており、自由移民が始まってからの家族で過ごす家を再現しているブースがありました。そこにはお茶碗やお箸、湯のみ、急須、日本式のダンス、そして神棚や仏壇もございました。ハワイに来てもご先祖様を大切に敬う気持ちがあったようです。

ハワイには故郷に錦を飾る思いで移民することを決意した方々を祀る、ハワイ日本人先亡慰霊碑には、日本式のお墓がたくさん残っています。墓石のほとんどは海を向いて建っている事、これはガイドをしてくれた本田先生が「これは日本人が本当は日本に帰りたいかった」という思いが強かった為、海を向いていると教えていただきました。過酷な労働を続けてきた彼らの母国を愛する強い

思いをかんじました。ただ彼らがハワイに残ることで今のハワイと日本との深い絆を結び続けてくれているのです。「Our story・Our history（彼らがいたおかげで今の私たちがこのように暮らしている）」先人たちが造り上げてきた歴史を私たちの年代や今の子供たちは知らない人も多いでしょう。グローバルステージに参加した事でハワイと日本の歴史に関してとても興味を持つ方ができ、もっと詳しく知りたい。他の歴史も楽しく伝える方法があるのではないかと考えました。

## ハワイの観光について

私は福岡の原鶴温泉にてフロントの業務に携わっております。私にとっての今回初めての海外、それも世界で有数の観光地のハワイでホテルの接客、観光地の魅力を学んできました。私たちが宿泊したホテル目の前には観光地ワイキキビーチが広がっていました。ワイキキのビーチは元々沼地だったところを沖から砂を運びビーチをつくりあげたそうです。現在ワイキキ改善協会は約170企業が組合に参加しており、行政と民間が一体となって観光地を盛り上げ、ワイキキで働く方と集会を開き、ワイキキの道をただ通るだけの道ではなく、楽しんでもらう道にしていく活動や数年に1回ビーチの砂の入れ替えを行う活動もしています。

その他にも

- ・歩道にはハワイの歴史、文化が学べるプレートを設置
- ・フラマウンド 無料のフラをする為だけの専用のステージを建設
- ・コンクリート、アスファルトだけではなく木や花、石、水を取り入れる
- ・ハワイの雰囲気造りの為にガス灯に毎晩火を灯す
- ・フリーの観光案内パンフレットを配置する

などを行いまさに「楽しんでもらう道」をつくりあげています。

また、カラカウアストリートには、アロハパトロールと呼ばれる黄色のベストを着たスタッフを配置し、見回り、管理、ゴミ拾い道案内も行っているとのこと。人通りが増えることでゴミの問題が出てくるとは思いますが、アロハパトロールの活動と地元の人々のきれいにしようという意識の表れが観光地としての成り立ちと考えられます。

ワイキキのホテルに足を踏み入ると、日本でも耳にすることのある「アロハ」という挨拶で出迎えられた。お客様と接するとき、日本ではかしこまった接客が普通だが、ハワイでは気軽に話しかけられるような雰囲気があり、お客様と距離が近づくような観光地ならではのコミュニケーションをとっていました。多くの観光客が訪れるハワイの土地柄や文化に合わせた対応のようです。私たちは、お客様と接する際は謙譲語を使います。お客様への対応は必ず丁寧かつ、遜った言葉を使いながら、細やかな目配り・気配り・心配りが私たちの接客するスタイルです。ハワイの接客は訪れるお客様が気軽に楽しむことが出来るものです。

私は今回ハワイに派遣させていただき普通では体験できないホームステイ、普段行くことのできない観光地に行けたこと、そして何より福岡県人会の方々、現地の日系人、日本人の方々との交流により様々なお話を聞いたこと。とても貴重な経験をさせていただきました。ハワイの方々のも暖かい気持ちに触れることもできたし、たくさんの歴史を学び、興味を持つことができました。これからはここで学んだハワイの方が大切にしている気持ち、私たちの学ぶべき歴史を伝承する事、自分で感じた・学んだことをこれからの生活、仕事で活かすことに努めていきます。

日本の接客、細やかな気配りを誇りに思っていますが、観光地ならではの異なる文化を持つ観光客が楽しめる接客も素晴らしいものだと感じました。海外のお客様にもあわせた満足のいく日本のおもてなしができる事を目標にこれから日々向上していきます。

## グローバルステージ in HAWAII 報告書

株式会社久原本家食品茅乃舎  
筒井 美里

私は、グローバルステージに参加するにあたり下記3つの目標を立てさせて頂きました。

1つ目は、食品会社に勤めておりますので、ハワイの食文化やお店でのサービスについて学び、日本との違いを知る事、また弊社では珈琲を淹れておりますので、珈琲事業の盛んなハワイの珈琲についても勉強し、自身のスキルアップに繋げる事。

2つ目は、現地でハワイと福岡の魅力を語り合い、海外の方から何を求められているのか、期待されているのかを知り、今後の福岡とハワイの絆を深める為、ネットワーク作りに励む事。

3つ目は、移民の方々が歩んで来られた歴史や、想いに触れ日本との関わりを学び、次世代へ伝えていく事。この3点について取り組んで参りました。

まず、1つ目の食文化や食について話を伺い驚いたことがあります。ハワイに移住して63年になる TAKASAKI 夫妻に、ハワイに移住した当時の食について質問した所、当時の食事でも口に合わない物は何一つなく何でも食べる事が出来たと話して下さいました。私は異国の地では、気候や土壌の違いで食材も違ってくるので、食に関して苦労しただろうと思っておりましたので、昔から日本食が主流だった事に感動致しました。当時の朝食はもちろん「ご飯とみそ汁」だったそうで、豆腐があったことにも大変驚かされました。皆自給自足の生活で豆腐や野菜等も作っていたそうです。またハワイは良い気候に恵まれているので、野菜や果物もよく育つそうです。移民が始まった1885年頃の食材は数も少なくハワイ独自の野菜や果物ばかりだったそうですが、ハワイは日本の移民や他国の移民も多く、それぞれが色々な食材を持ち込み、少しずつ増えてきたそうです。その事がよく反映されているのが現在の食文化だと思います。

ハワイは1つの民族が大多数を占めているのではなく、少数民族がたくさん集まっている 人種多様な所です。それぞれ異なった民族の文化を受け継ぎ混合されて来た為、ハワイには本当に様々なジャンルの食文化がありました。また、自分自身のルーツが4つも5つも違う国が合わさっているので、それぞれの文化を受け継いでおり、どんな食事でも美味しく感じるようでした。異国の地に行く時食に対する不安は大きいですが、ハワイは移民の方々が築いて来られた食文化もあり、食べていくことに困らなかったという事を知り改めて食の面白さを学ばせて頂きました。

そして珈琲についてですが、コナ珈琲の次にメジャーになって来ている Ka'u 珈琲の農園に行かせて頂きました。職場では毎日珈琲を淹れ、珈琲豆に触れているのですが、実際に珈琲の木を見るのは初めてで、手入れの行き届いた立派な木や、ベリーや生豆の大きさが予想以上に大きい事、そしてベリーを食べてみると甘くみずみずしく美味しい事等、実際に見ることで自分の知識がより深まりました。また生豆を干している様子やパッケージの部屋等を見せて頂き、私達が使うまでの過程を知る事が出来ました。Ka'u 珈琲は香りも良く、甘みがあり後味もすっきりしていました。大切に育てられた珈琲を味わい、お話を伺う事で生産者側の熱い想いが伝わって来たように思います。珈琲はとても奥が深く、まだまだ勉強しなくては！と日頃から感じておりましたが、今回このような

貴重な経験をさせて頂いた事でより興味が増しました。出発前にもお馴染みのお客様や珈琲の顧問の先生に珈琲について勉強してきますと宣言してききましたので、自分の言葉としてこの経験を活かしていきたいです。

次に、2つ目の福岡とハワイの魅力を語るという事で、現地では出来る限りたくさんの質問をし、互いの国について語り合いました。日本のおもてなしのイメージや好きな食べ物、日本で食べたい物、車や企業そして日本の漫画やゲームの話でも盛り上がる事が出来ました。私たちが思っている以上に日本や福岡の事を知っててもらえたことが嬉しく、ハワイで身近な話が出来たことがとても新鮮に感じました。また、日本のおもてなし等について語る機会がありましたが、日本のサービスは本当に素晴らしいと語って下さいました。日本ではどこに行っても各地方の特産品や名物のお店があり大変面白いそうです。そして安心安全のイメージも強く、案内も徹底されている、と話して頂きました。これらは実際に日本に期待されている事でもあると思います。

私がハワイと日本のサービスで、ここは違うなと感じた事があります。もちろんチップ制度があるかないかは大きな違いだと思いますが、ハワイでレストランやカフェに行くと、サービススタッフが多いように感じました。よく見ると、作業している人もいれば、お客様とずっと話している人もおり、日本ではなかなか見る事がない風景だと感じました。この事について伺うと、チップ制度の効果で自分が頑張った分成果が出るので、皆積極的に接客するのだとおっしゃっていました。チップ制度があると、従業員のやる気にも繋がり、一人一人がお客様に喜んで頂けるよう動いて行けるので、とても楽しそうなお店の雰囲気になっていて、これも一つのサービスの在り方だと感じました。逆に日本では決まった金額の中に、たくさんの気配り心配りが詰まっています。さりげない心地よさに自然とまた行きたいと思える所があると思います。このようなおもてなしの違いを感じ、やはり私は日本ならではの心配りの詰まったおもてなしは素敵だなと改めて思いました。

そして、色々な方と交流する中で、ハワイが予想以上に英語圏なのだという事を学ばせて頂きました。もっと勉強していればより深い話が出来たと思ひ、そこは自分自身足りなかった所だと感じております。現地で出会った方々とは Facebook で友達になることが出来、今英語でメッセージのやり取りをしていますので、これを機に更に自身のグローバル化に力をいれたいです。

最後に、移民された方々の歴史を学ぶという事ですが、ハワイには移民の歴史が長いという事もあり、色々なところで資料が残っており、たくさん学ぶことが出来ました。その中で印象に残った言葉があります。「Our story Our life 私たちの話、私たちの生活」です。これは実際に起こった歴史をなんとなく勉強するのではなく、自分自身の話として考える事が出来れば…自分たちのおじいちゃん、おばあちゃんがいつも語ってくれる話だと視点を変えれば、もっと面白く歴史を身近に感じる事が出来るという事だそうです。私自身歴史を勉強する事が得意ではなかったのですが、この話を聞きより先人達が歩んできた事をしっかり勉強したいなと感じる事が出来ました。

私がハワイに来て色々な方に話を伺い、すごいな・面白いなと感じた事があります。それは、日本に住む日系の方々には皆、自分たちの祖先が歩んできた歴史をしっかりと知っていることです。それもほとんどが親から子へずっと語られながら伝わってきたそうです。日本では歴史について学校で学ぶぐらいで、興味もなければ自分に関係のない話…で終わってしまうのですが、ハワイでは自分自身のルーツ・自分の血について知りたいと感じ、家族の事を学びたいという意識が強く、現代まで語り継がれています。こういった事は日本とは違うなと感じると共に、もっと私達日本人



も自分たちの祖先の歩んだ道を知るべきだと改めて感じさせられました。

そして日本文化センターに残されてある13個の言葉の塚。(犠牲・義理・名誉・恥・誇り・責任・忠義・感謝・仕方がない・頑張り・我慢・恩・孝行) これらがある事は事前に調べて行きましたが、実際に見てみると、想像以上にどれも重みのある言葉で、移民された方の苦労や大変さ等様々な事を感じる事が出来ました。また、自分自身と重ねた時にこれらの言葉に思う所がいくつもあり、社会に出てからの7年を改めて振り返る事が出来たように感じます。

今回移民の勉強をしていく中で、職場の若い子や友人達に話をする機会がありました。しかし、移民の話はほとんどが知られておらず、こんなにもハワイへ行く日本人が多いのに知られていないというのは悲しいなと感じました。ハワイは観光地のイメージが強いですが、もっと魅力的な見所がたくさんあります。日本人が見るべき所が本当に多く、日本を出て初めて自分たちの国について勉強出来るというのは素晴らしい事だと思います。このハワイの魅力を伝えると共に、新天地に挑んで来た方々の足跡が忘れられることのないよう、実際に自分の目で見て肌で感じた事をより自分の言葉として伝えていきたいと思います。

今回、このプログラムに参加させて頂き様々な経験を致しました。色々な方との交流や移動の車中での意見交換、ホームステイ先では移民の話や地域性のお話を伺い、企業訪問では社会人としての姿勢を改めて考えさせられました。あらゆる所で自分自身のヒントとなる物を見つける事が出来たように思います。また一緒に参加したメンバーは皆違う分野から来ていますので、色々な考え方や想いがあり、意見交換も弾み互いに刺激を受ける事が出来ました。本当に毎日が学びの日々であつという間の9日間でした。ここまでの皆さんの内容を勉強できる機会はなかなか無いと思います。現地でも時間が足りず、まだまだ勉強したい事が山ほどあります。このプログラムに参加した事で、視野を広く持ち、世界を観て考える事の大切さを学びました。今後はこの貴重な経験を活かし、積極的に国際交流の事業や福岡県人会の取り組みに参加し、私自身も勉強していきたいと思っています。

大変貴重な経験をさせて頂き誠に感謝しております。ありがとうございました。